

# 「オネエ所長の調査ファイル」 # 3

山崎浩治

1

「トオルちゃんを見てるとあたし、胸がドキドキするのよ。これって恋かしら」

「所長の年なら不整脈だと思いますよ。病院で検査した方がいいんじゃないですか。そもそも所長って、年はいくつなんです？」

「女に年齢の話題はタブーよ」

「あ、すみません！……って、所長は男でしょうが！」

「外見は男でも、心は恋する乙女なの！」

とある平日の昼前、金沢市郊外の住宅地で大衆車に乗った「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長・市山とイケメン調査員の透が張り込み中である。女装した市山はこの日、ボディコンスーツ姿で、耳元には小さなピアスが光っている。

今回の依頼人は金沢市に住む専業主婦・麻美(30歳)だった。公務員の哲也(35歳)とは4年前、見合いを通じて出会い、半年の交際を経て結婚、2歳の息子がいる。新婚しばらくは夫婦だけで生活していたが、1年前に哲也の父が急死、姑の順子(63歳)が一人暮らしになったことから、実家で同居することになった。

そのころから順子の「嫁いびり」がひどくなり、先日、「あなたのようなしつけのなっていない人は我が家の嫁として相応しくない。親権を息子に渡し、離婚してほしい」と無理強いされて家を飛び出した。学生時代の友人宅に身を寄せた麻美が「このままでは息子を取られてしまう」と市山に相談してきたのは数日前のことだった。

「平日の真っ昼間にダンナの実家を張り込むなんてどういうつもりです？ 調べるなら仕事中のダンナの方でしょう」

「夫を調べたって、どうせ「女、はいないわ」

哲也の家は、ともに公務員だった彼の両親が所帯を持った一人息子と同居しようと、定年退職を機にリフォームした大邸宅である。助手席の市山が不意に声を上げた。

「ターゲットが出てきた！ 尾行して、トオルちゃん！」

駐車場から現れたのは順子が運転するセダンだった。トオルが呆れて言った。

「姑を尾行してどうすんですか！」

2

ホテルの高級レストランに向かった順子は、そこで同年代の女性4名と談笑しながら昼食をとった。依頼人によれば、生け花、茶道、踊り、山登り、海外旅行と多趣味な順子は連日のように外出している。昼食の同席者は趣味仲間だろう。依頼人から「嫁いびり」の話聞いていたせいか、上品そうな順子の笑顔には底意地の悪さが透けて見える気がした。尾行を終え、オフィスに戻った透が落胆を隠さず口を開く。

「ランチの話題はそれぞれの家の嫁の悪口が多かったですね。所長の指示通り、会話はこっそり

録音しましたが、あれぐらいの悪口、姑なら誰でも言いますよ。録音しても依頼人が有利になるとは思えません」

「まあ一応、念のためよ」

「ダンナに不貞行為がないのなら、依頼人には家に戻るようアドバイスした方がいいんじゃないでしょうか」

「バカなこと言わないで。あたしは相手より先に調停を申し立てるよう依頼人に助言するつもりよ。向こうが「妻は理由もなく子どもを連れて家出した、なんて言い出したら、否定するにも骨が折れるからね。家庭という密室で行われる「嫁いびり」は立証が大変なの」

翌日、市山は透に指示して麻美の実家周辺の住人に聞き込みをさせ、母子家庭に育った依頼人が「幼いころから母を手伝って家事をしていた」「誰にでも明るくあいさつする行儀のよい子だった」などの証言を集め、調停に備えて陳述書を作成した。

「第三者の言うことだから証拠能力は高くないけれど、「しつけがなっていない、という姑への反論になるわ」

「準備が整ったので、いよいよ離婚調停ですね」

「誰が離婚調停なんて言った？ 依頼人が申し立てるのは、夫と姑が共同して夫婦生活を破綻させたことによる慰謝料請求調停よ」

### 3

親戚から「顔を立てると思って一度だけ会って」と強く頼まれ、断り切れずに見合いをした。哲也は明るい性格で、おまけにスポーツマン。職場でも女性職員から人気が高いというのも、うなずけた。見合い当日、仲人役の親戚を通じて「結婚を前提に付き合っしてほしい」と申し込まれ、交際を了承する。仕事は安定した公務員。父親を早くに亡くして一人娘の麻美を女手一つで大学まで出してくれた母親を安心させるには申し分のない結婚相手だと思ったからだ。けれど、その母親は結婚式の直後、麻美の花嫁姿を見届けて安心したのか、あっけなく病気で逝った。

哲也はこれまで何人かの女性と交際したことがあるらしいが、続かない理由が結婚後に分かった。折り紙付きのマザコン男だったのだ。中学生じゃあるまいし、三十路男がいまだに母親が買ってきた洋服を着ている。結婚前はデート中、母親から頻繁に電話やメールが入り、結婚後は仕事帰りに実家に寄って一緒に夕食をとることもしばしばだった。物事の決定権は母親に委ねていて、何かというと順子の意見を聞いてそれに従うのだ。

それでも姑と別居していれば、まだ我慢できただろう。裕福な家でわがまま放題に育った順子は義父の死後に同居すると、ちょっとした意見の食い違いがあるたび暴言を吐いた。外出が多く、家事のすべてを麻美に押しつけているくせに掃除が下手だ、ご飯が硬いの軟らかいのといちいち難癖をつける。「うちの味じゃないわ」と、みそ汁を作り直したことは数え切れない。とりわけ我慢がならなかったのは、何かというと聞こえよがしのため息を吐いて「これだから片親で育った人は……お里が知れるわ」とこぼすことだった。

ある時、ついに堪忍袋の緒が切れて「私は母に立派に育ててもらいました。恥ずかしいお里で

はありません」と言い返す。すると姑は「土下座して謝りなさい。でないと裁判に訴えてでも、息子と離婚させるわよ」と目を吊り上げて激怒した。子どもを抱いて家を出たのはその直後のことである。エプロンにサンダルという衝動的な家出だった。

学生時代の友人宅に避難した麻美は、すぐに求人情報のフリーペーパーを見たが、これといった資格やスキルのない彼女には単純労働のパートか、非正規の派遣社員の仕事しかなく、時給は1000円にも満たない。未満児の息子を保育所に預ければ、その費用と相殺されるような低賃金だった。

思えば実母との暮らしも貧しかった。でも、それを不幸だと思ったことは一度もない。母は人の何倍も働いたが、誰にも負けない愛情を麻美に注いでくれたからだ。自分もまた、息子にそうすればいい。離婚を決意すると、憑き物が落ちたようなさっぱりした気分だった。

4

麻美名義で「夫と義母に慰謝料請求調停を申し立てる」との内容証明郵便を送ると、あわてふためいた哲也から連絡があり、市山は「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスに招いた。哲也は向かい合うなり、鋭い視線で市山をにらみつけた。

「書面ではおふくろが妻に離婚を迫ったとありますが、あれは本気じゃありません。あくまでお灸を据えるつもりだったんですよ」

「お灸ねえ……」

市山が疑わしげに首を傾げた。

「片親で育った妻には分からないでしょうが、子どもにとって両親は絶対に欠かせません。離婚によって心理的、経済的、社会的に不利益を被るのは息子なんですよ。私は子どものために離婚を避けたいんです」

「あなたの言う通り、家庭のなかで最も弱い立場の子どもを守るのは親の責任よ」

我が意を得たりとばかり、哲也がうなずいた。

「そうでしょう。それなら、調停を申し立てるのはやめて……」

「だけど本当に子どものためを思うなら、仲のよい夫婦でなきゃ意味がないのよ」

「もちろんですとも！」

「あなたのお母さんはどう？ 仮に奥さんが戻っても、お母さんが変わらない限り、同じことの繰り返しよ。そしてお母さんが変われない人だってことは、あなた自身が一番よく知っているんじゃないかしら」

しばし沈黙した哲也が口を開いた。

「どうしても妻が離婚したいというなら、息子の親権は私がもらいます。親権は母親が有利といいますが、妻は無職で、私は公務員。どちらが親権に相応しいか明らかでしょう」

「あなたが親権を取ったとして、誰が子どもの面倒を見るの」

「それはおふくろが……」

「あら、そう」

市山がボイスレコーダーを取り出し、再生すると、いつかホテルのレストランで録音した順子の甲高い声が聞こえてきた。

「祖父母は、孫もり、するのが至上の喜びだなんて思わないでほしいわ。40年近く働いて、子育ても終わり、やっと定年を迎えたのに、いまさら孫の面倒なんか見てられますか。私はこれから趣味に習い事、旅行と自分の人生を楽しむつもりなの！」

哲也の表情から血の気が引いていく。市山が諭すように語りかけた。

「あたしは、活動的なあなたのお母さんが喜んで、孫もり、するとは思えないのよ。それとも、あなたが休職して子育てする？ まさか引き取った子どもを施設に入れるつもりじゃないでしょうね？ どうしても親権を争うというなら、この音源を調停に提出させてもらうわ」

5

「養育費月8万円。慰謝料200万円。息子の大学進学時に別途学費も負担する」との条件で、夫婦の離婚が成立したのは、それからほどなくのことである。「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで、市山と透が調査を振り返った。

「今回は夫と姑相手に調停を申し立てる作戦がポイントだったんですね」

「調停になったら、姑も当事者として出席しなければならなくなるわ。プライドの高い姑にとって絶対に避けたい事態だったわけ。しかも結果的に協議離婚になったから、離婚の条件も格段によくなった。調停なら、こんな金額にはならなかったでしょうね」

「嫁いびり、の代償は高くつきましたね」

「嫁と姑は世界で2番目に親しい他人。だからこそ、親しき仲にも礼儀が必要だったのよ」

「1番目に親しい他人は誰なんです？」

「もちろん、夫婦に決まってるじゃない」

それから半年後、市山と透が様子を見に行くと、麻美は30代の男性と息子とともに大型スーパーの食品売り場で買い物をしていた。市山はカツラの長髪をポニーテールに結び、花柄のブラウスとフレアスカートといういでたちである。これでエプロンをつけたらメイドじゃないか、と内心毒づきながら、透が言った。

「依頼人が家出して身を寄せた友人、とは、あの男性だったのかもしれませんがね」

「そんなこと、どっちだっていいじゃない。あたしたちの仕事は依頼人を幸せにすることなんだから」

「所長は最初から分かってたんですね！」

透の問いに答えないまま、市山が大股で歩き出すと、周囲の買い物客がギョツとしたように道を開ける。その背中では茶色に輝くポニーテールが左右に揺れていた。